

大学生のアパシー傾向と時間的展望の関連

宮澤友真 信州大学大学院教育学研究科学学校教育専攻臨床心理学専修
水口 崇 信州大学教育学部教育科学グループ

概要

大学生のアパシー傾向に影響を及ぼす要因を分析した。青年期の症状の一つとしてアパシーが指摘されてから、50年以上が経過した。現在、大学生全般が軽度のアパシー傾向を有することが報告されている。本研究では、時間的な展望がアパシー傾向に及ぼす影響を検討した。大学生185名を対象にアパシー傾向測定尺度と時間的展望体験尺度を用いた質問紙調査を行った。重回帰分析の結果、現在・未来の時間的展望に加えて、過去の時間的展望からも、アパシー傾向に影響を受けることが示された。今後、大学生や大学の有り方の変化とアパシー傾向の関連についてさらに検証を重ねていく必要があるだろう。

キーワード：大学生、アパシー傾向、時間的展望

問題と目的

子ども・若者白書によれば、大学進学率は平成26年に53.9%となった(内閣府, 2015)。知識基盤社会や就業構造の変化により、今後さらに高等教育修了の需要が増加すると推測している。こうした時代背景を受け、エリクソンのライフ・サイクル論で言うところの青年期が従来よりも拡大してきたことは周知の事実である。青年期には、多くの発達課題が存在する。例えば、親からの自立・アイデンティティの確立・職業選択などである。心身共に著しい変化が起こる中で、引きこもりやNEETをはじめとして、様々な精神疾患の危機にさらされる時期でもある(下山, 2003)。無気力症状を示すアパシーもこの時期に見られる問題の1つである。

Waltersは1961年、学生に見られるアパシー症状を初めて提唱した。当時の米国で、青年期後期において直面する男らしさの形成という課題に関し、独特のアパシー症状を見せる男子大学生が見られることを指摘した。これを Student Apathy (以下, SA) と名づけた。

日本では、1960年代後半の高度経済成長以降、Waltersが考案したSAに関する注目が高まってきた。当時の社会的な背景として、大学の進学率上昇に伴い、学生支援や精神保健の領域から、「意欲減退学生」と呼ばれる、学業に対する意欲を失った学生が報告された。

そのような時期に、SA の概念は、国内に取り入れられた。笠原（1984）は、いつの時代にも、似た精神障害は存在するとした上で、時代の諸条件と癒着して生じる「時代病」的な精神病理現象を指摘した。アパシーもこれに該当し、青年期の延長に伴う独特の反応とした。社会や時代背景と精神病理は強固な関連を有しており、それは大学生のアパシーにおいても例外ではない。また、笠原（1988）は、アパシーに代わって、神経症類型の一つとして「退却性神経症」という診断名を提唱した。しかしながら、アパシーの症例が蓄積されてきた頃から、「退却」という用語では一義的に説明できないことが指摘されるようになった。そして、この診断名はほぼ使用されなくなった。

以上のような経緯を経て、概念としての SA は、国内に広く浸透してきた。その主要な特徴は、主に学力に対する意欲の低下であった。不安や抑うつといった精神症状は伴わず、本人も自身の症状を深刻に捉えないため、状態像は怠惰と類似して見えたことも大きな特徴であった。

しかしながら 1990 年代以降、SA の概念の混乱は常態化している。下山（1996）によると、混乱の原因は 2 つに大別される。第一に、時代の経過である。時代の経過に伴い旧来の定義が拡散し、研究者が独自の定義を用いて研究を行ってきたためである。第二に、SA という症状自体に内在する多面的性質である。具体的には、精神病理的な側面と、発達心理的側面が混在している点が挙げられる。このように、20 年前から、従来の SA という概念で大学生のアパシーを捉えることに困難が生じてきた。

加えて、伝統的な SA は、男子大学生特有のものとされてきた。しかしながら、Walters が SA を提唱し、日本で SA が知られるようになった 1960 年代と比較して、女性の大学進学率が著しく高まっている。平成 26 年の時点で、大学の在学者数は男子大学生約 160 万人、女子大学生も約 120 万人となっている（内閣府，2015）。このため、大学生のアパシーの実態を知る上で、男子大学生に限定せず、女子大学生についても同様に検討していく必要があると考えられる。下山（1996）によれば、そもそもアパシー状態の学生は自発的な来談が稀で、困難な状況であっても回避や否認をするため、治療継続が困難となる。このため、治療法に関して言及している論文は散見されるが（e.g. 狩野・津川，2011）未だ不明な点が残存している。従って、アパシーが深刻化する前に何らかの予防的措置を施すことが重要になると考えられる。アパシーに至る機序や要因については明らかになっていないことから、関連のある要因について研究を積む必要がある。

SA の概念の混乱が指摘された 1990 年代、アパシー傾向の拡大や状態像の多様化も指摘されてきた。鉄島（1993）は、従来は SA とされてこなかった一般学生の「アパシー傾向」について研究することの必要性を主張した。治療的援助が必要とされる臨床群の学生ではなく、アパシーの傾向を持つ一般学生を対象とした。そしてアパシー傾向を「精神病の無気力とは異なり、心理的原因で主として学生の本業である学業に対して意欲の減退を示すこと」と定義した。その上で、スクリーニングするため、アパシー傾向測定尺度を作成し

た。さらに、アパシー傾向と両親イメージ・進学動機の因子得点、自我同一性得点、家族イメージを含む14の変数との関係について検討を行った。また、吉田(1996)は、SAには重症度の違いに着目した。重症度により、その後の適応が異なるとし、アパシー傾向尺度APSの作成を試みた。このように、重症化していない一般学生のアパシー症状に関する研究も蓄積されつつある。

大学生の不登校に関する荒井・石田・大塚・岡本・兒玉(2011)は、国立大学の大学教員に不登校問題を呈した学生の特徴を尋ねた。調査の結果、教員が「無気力」、「適正の問題」、「心理的問題」、「対人スキル」の4観点から不登校学生を理解していた。また、そうした学生は「アパシー群」、「心理的問題群」、「不明群」の3つのタイプに分けられ、教員の支援方法も異なっていたことがわかった。

時間的展望とは過去・現在・未来について個人がもつ思考ないし態度のことである。都筑(1982)は、時間的展望の構造を「自己の過去や未来にどのような出来事を想起あるいは予想するかという認知的側面と情緒的側面の2つが含まれている」と概観した。また、時間的展望の構造は、ゆるやかな構造をなしているとして、相互関連性は十分に解明されないことを指摘した。

杉山・神田(1996)は、一般的統制感および時間的展望とアパシー傾向の関連性について検討した。アパシー傾向を、未来展望から影響を受ける心理的要因であると想定した。その結果、未来尺度がアパシー傾向に負の影響を及ぼすことが確認された。しかしながら、未来や現在は過去の経験の上にある。過去を全く考慮せずに、単独で影響をもつと断定することはできないと考える。

以上のことから、本研究の第一の目的は、大学生のアパシー傾向に影響を与える要因として、過去から現在も含めた時間的展望との関連を明らかにすることである。第二に、現代の大学生における、アパシー傾向測定尺度および時間的展望体験尺度の因子構造を検討することである。仮説は以下の2つである。Ⅰ. 現在・未来の時間的展望に加えて、過去の時間的展望からも、アパシー傾向は影響を受けるだろう。Ⅱ. アパシー傾向測定尺度および時間的展望体験尺度の因子構造には変化が見られるだろう。

方法

参加者

甲信越地方の大学の教育学部生185名(男性76名、女性108名、不明1名)であった。年齢幅は19~24歳であり、平均年齢は19.76歳(標準偏差0.76)であった。調査時期は2015年の5月および1月であった。回答に不備があったものを除き、149名(男性62名、女性87名)のデータを分析に用いた。

手続き

大教室で開講される授業の開講前後に、大学生の意識調査として質問紙調査への協力を

依頼した。ほぼ全員から協力を得ることができ、記入直後にその場で質問紙を回収した。回収率は100%であった。

倫理的配慮

回答の有無および内容がとは関係しないこと、データは統計的に処理されるため個人が特定されないことを口頭で伝えた後、質問紙を配布し、回答を求めた。

質問紙の構成

(1) フェイスシート項目 質問紙の始めに学年、性別、および年齢について尋ねた。

(2) アパシー傾向測定尺度 大学生のアパシー傾向を測定するために、31項目から構成される鉄島(1993)のアパシー傾向測定尺度を用いた。1点(全く当てはまらない)から6点(非常に当てはまる)の6件法で回答を求めた。得点が高いほどアパシー傾向が強いことになる。質問紙の項目について、心理学を専攻する学生10名で検討し、大学生の現状に沿わないと考えられる表記について一部変更した。

(3) 時間的展望体験尺度 18項目から構成される、白井(1994)の時間的展望体験尺度を用いた。1点(あてはまらない)から5点(あてはまる)の5件法で回答を求めた。5月に実施した調査97名分について、教示文において「1点から6点まで、該当する数字に○をつけていってください」と誤った記述をした。しかしながら、大多数の回答では解答欄に用意されていた1点から5点までの間で回答されていたため、分析を行った。

結果

因子分析による変数の抽出

アパシー傾向測定尺度 分析に用いる変数を抽出するために、最尤法プロマクス回転による因子分析を行った。項目分析により、フロア効果が認められた項目2, 4, 5, 7は分析から除外した。因子分析の過程で、項目9, 12, 20, 24を除外した。先行研究(鉄島, 1993; 杉山・神田, 1996)の報告で3因子構造であったこと、スクリープロットの結果より3因子構造を採択した。因子負荷量が.35以上のものを解釈に用いた。因子負荷量を表1に示す。

第2因子、第3因子は先行研究の「学業からの退却」「授業からの退却」と一致した。第1因子については、一部先行研究と異なる因子に寄与している項目もあった(「授業に出席するよりは自分の好きなことをやっている方がいいと思う」「授業の履修を真剣に考えなかったために、後になってから困ることが多い」など)。項目を検討した結果、本研究の因子分析を採用し、積極性や意欲に関する項目が多く含まれていることから第1因子を「学生生活における積極性の退却」と命名した。因子間相関を表2に示す。クロンバックの α 係数は、第1因子で約0.82、第2因子で約0.66、第3因子で約0.63であった。

表1 アパシー傾向測定尺度の項目 因子分析結果

項目	F 1	F 2	F 3
29 注意を集中するのは他の人より苦勞する	0.710	-0.242	-0.075
27 自分の興味のある事柄でさえ、あまりエネルギーをそそぐ気がしない	0.699	-0.036	0.041
28 大学での勉強もアルバイト活動などもあまりやる気が起こらない	0.691	0.029	0.011
30 私は大学の友人と一緒にいるよりは、自分の部屋で本を読んだり映画に行ったりする方が好きである	0.580	-0.129	-0.075
25 1つの課題に打ち込むことができない	0.575	0.014	-0.020
17 出来栄えは納得しなくても、レポートは提出さえすればいい	0.512	0.097	-0.050
26 大学で交流のある人といえば、共通の関心ごとのある人が数人いる程度だ	0.505	-0.111	-0.080
10 授業の履修を真剣に考えなかったために、後になってから困ることが多い	0.467	-0.055	0.127
15 勉強に関する本を読んでもすぐに飽きてしまう	0.463	0.342	-0.246
31 大学での時間は私の生活の中で有意義である	0.402	0.003	0.034
14 授業は積極的に参加するというよりも、いつもただ座っているだけと言う感じだ	0.372	0.282	0.105
11 授業に出席するよりは自分の好きなことをやっている方がいいと思う	0.368	-0.073	0.224
22 授業で疑問に感じられる箇所があれば積極的に教師に質問に行く	-0.256	0.773	-0.014
13 教師に言われなくても自分から進んで勉強する	0.060	0.615	-0.004
23 卒業に必要な単位を取得していても、自分の興味関心にあった授業は取る様にしている	-0.107	0.547	0.039
19 授業でとりあげられた参考書には目を通す方である	-0.053	0.483	0.012
21 時間を忘れて勉強することがある	0.171	0.416	-0.047
18 これまでと同じように勉強や課題が良くできる	0.142	0.396	0.165
16 勉強で疑問に思うときはすぐに調べる	0.019	0.375	0.154
1 必修科目などの重要な授業にも、つい出る気がしなくなって欠席してしまうことがある	-0.032	0.034	0.945
3 何となく授業をさぼることがある	-0.021	-0.005	0.853
6 朝寝坊などで授業に遅れることが多い	0.073	-0.320	0.557
8 授業は何よりもまず第一に優先している	0.029	0.168	0.370
累積比率	0.159	0.264	0.364

表2 アパシー傾向測定尺度 因子間相関

	学生生活における積極性の低下	学業からの退却	授業からの退却
学生生活における積極性の低下		0.349	0.419
学業からの退却			0.049
授業からの退却			

時間的展望体験尺度 分析に用いる変数を抽出するために、最尤法プロマクス回転による因子分析を行った。平行分析および因子分析の過程で項目5, 6, 8, 15, 16を除外した。平行分析の結果および、累積比率より、4因子構造を採択した。因子負荷量.40以上のものを解釈に用いた。因子負荷量を表3に示す。

第1因子は先行研究（白井, 1994）で「目的指向性」および「希望尺度」にあたる項目が多く含まれている。項目1「私にはだいたいの将来設計がある」、項目4「私の将来は漠然としていてつかみどころがない」など将来のイメージの有無に関わると考えられ、「将来の見通し」と命名した。第2因子は項目17「私の過去はつらいことばかりだった」、項目14「今の私は本当の自分ではない様な気がする」など過去・現在・未来における自身をイメージし、受容できているかどうかに関わる項目であると考えられ、「自己受容」とした。第3因子は項目13「毎日がなんとなく過ぎていく」、項目12「毎日が同じことの繰り返しで退屈だ」と、現在の生活における抑揚の有無に関する項目であるため、「日々の抑揚」とした。第4因子は先行研究（白井, 1994）での「現在の充実感」にあたる項目が含まれている。項目10「毎日の生活が充実している」、「今の生活に満足している」と現在の生活に

表3 時間的展望体験尺度の項目 因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4
1 私にはだいたいの将来設計がある	1.013	-0.060	-0.109	0.001
3 私には将来の目標がある	0.873	-0.087	-0.066	0.026
2 将来のために考えて、今から準備していることがあ	0.837	-0.164	0.008	0.119
4 私の将来は漠然としていてつかみどころがない	0.604	0.207	0.053	-0.124
7 10年後、私はどうなっているのかよくわからない	0.442	0.204	0.184	-0.171
17 私の過去はつらいことばかりだった	-0.121	0.844	-0.185	0.062
18 私は過去の出来事にこだわっている	-0.083	0.795	-0.112	-0.083
14 今の私は本当の自分では無いような気がする	-0.063	0.482	0.125	-0.028
9 私には未来が無いような気がする	0.067	0.436	0.149	0.068
13 毎日がなんとなく過ぎていく	-0.102	-0.181	1.161	-0.057
12 毎日が同じことの繰り返しで退屈だ	-0.036	0.004	0.635	0.149
10 毎日の生活が充実している	0.368	-0.073	0.224	1.011
11 今の生活に満足している	-0.256	0.773	-0.014	0.534
累積比率	0.148	0.294	0.440	0.535

表4 時間的展望体験尺度 因子間相関

	将来の見通し	自己受容	日々の抑揚	現在の充実感
将来の見通し		0.546	0.221	0.692
自己受容			0.47	0.705
日々の抑揚				0.427
現在の充実感				

充実度を計っていると考えられるため「現在の充実感」と命名し、解釈した。因子間相関を表4に示す。

クロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子では約0.87、第2因子では約0.70、第3因子では約0.81、第4因子では0.80であった。

アパシー傾向と時間的展望体験の関連

各尺度得点は「各下位尺度の項目得点の合計/項目数」として算出した。基本統計量を表5に示す。

アパシー傾向の下位尺度である「学生生活における積極性の退却」「学業からの退却」「授業からの退却」各々を目的変数とし、時間的展望体験の「将来の見通し」「自己受容」「日々の抑揚」「現在の充実感」を説明変数とする回帰分析を実行した。初期モデルを加法モデルとし、ステップワイズ増減法により情報量基準 *BIC* を用いたモデル選択を行った。選出されたモデルを表6に示す。モデル選択ステップを表7に示す。

選出されたモデルにおける各項目の偏回帰係数とその検定結果は表8の通りである。

学生生活における積極性の退却 R^2 は0.447で有意であった($F_{3, 137} = 39.137, p < .001$, $effect\ size\ f^2 = 0.810, power = 1, adjusted\ R^2 = 0.436$)。したがって、「学生生活における

表5 基本統計量

	<i>N</i>	平均	標準偏差	最大値	最小値
学生生活における積極性の退却	149	3.1527	0.6689	1.4167	5.3333
学業からの退却	149	3.7701	0.6347	2.1250	5.8750
授業からの退却	149	2.8188	1.1386	1.0000	6.0000
将来の見通し	149	3.1772	0.8797	1.0000	5.0000
自己受容	149	3.3221	0.8029	1.0000	5.0000
日々の抑揚	149	2.7114	0.9969	1.0000	5.0000
現在の充実感	149	3.6577	0.8759	1.0000	5.0000

表6 採択されたモデル

学生生活における積極性の退却	＝「将来の見通し」＋「自己受容」＋「日々の抑揚」
学業からの退却	＝「将来の見通し」＋「自己受容」＋「現在の充実感」
授業からの退却	＝「現在の充実感」

表7 モデル選択ステップの要約

目的変数	Step	項の増減	df	残差増分	df	残差逸脱度	BIC
学生生活における 積極性の退却	1				144	35.474	236.03
	2	現在の充実感	1	1.114	145	36.588	235.63
学業からの退却	1				14	46.059	274.93
	2	日々の抑揚	1	0.403	145	46.462	271.23
授業からの退却	1				144	176.000	474.68
	2	日々の抑揚	1	0.541	145	176.000	470.13
	3	自己受容	1	0.556	146	177.100	465.60
	4	将来の見通し	1	2.678	147	179.780	462.83

表8 偏回帰係数の検定

目的変数	偏回帰係数	標準誤差	t値	p値	s t b
学生生活における 積極性の退却					
(切片)	5.084	0.202	25.165	ns	
将来の見通し	-0.193	0.053	-3.612	ns	-0.254
自己受容	-0.182	0.056	-3.234	0.002	-0.218
日々の抑揚	-0.264	0.047	-5.629	ns	0.393
学業からの退却					
(切片)	4.300	0.244	17.582	ns	
将来の見通し	-0.221	0.060	-3.663	ns	-0.306
自己受容	0.281	0.065	4.324	ns	0.355
現在の充実感	-0.206	0.063	-3.303	ns	-0.284
授業からの退却					
(切片)	4.013	0.390	10.283	ns	
現在の充実感	-0.327	0.104	-3.146	0.002	-0.252

注) stbは標準化偏回帰係数を示す

積極性の退却」は、「将来の見通し」+「自己受容」+「日々の抑揚」で説明される。係数は3尺度ともにマイナスを示している。日々の生活に抑揚が無いと感じるほど、学生生活における積極性の退却がおこる可能性を示唆している。将来の見通しや自己受容の低さも同様に退却に影響を及ぼす。

「現在の充実感」がモデル選択過程で除外された。現在に充実感を感じている学生は、学生生活やそれ意外の生活において充実感を感じている、ないし、充実感を求めて積極的な学生生活を送るためではないかと考えられる。

学業からの退却 R^2 は0.221で有意であった ($F_{3,145} = 13.700, p < .0001, effect\ size\ f^2 = 0.283, power = 1, adjusted\ R^2 = 0.205$)。したがって、「学業からの退却」は「将来の見通し」+「自己受容」+「現在の充実感」で説明される。係数は「将来の見通し」と「現在

の充実感」はマイナスであるが、「自己受容」はプラスであった。将来の見通しと現在の充実感が無く、自己受容が高いほど学業から退却する可能性を示唆した。「日々の抑揚」はモデル選択過程で除外された。

授業からの退却について

R^2 は0.067で有意であった ($F_{1,147}=9.810, p=.002, \text{effect size } f^2=0.067, \text{power}=0.882, \text{adjusted } R^2=0.057$)。したがって「授業からの退却」は「現在の充実感」で部分的に説明される。係数はマイナスを示した。現在の充実感が無いほど、授業から退却することが示唆された。その他の3尺度はモデル選択過程で除外された。将来の見通し、自己受容、日々の抑揚を低く評価する人は、授業へ参加する方がむしろ不安を取り除くことにつながるからではないかと考えられる。

考察

本研究は、アパシー傾向と時間的展望の関連を明らかにすることが目的であった。アパシー傾向の各下位尺度を目的変数、説明変数に時間的展望を想定し、重回帰分析を行った。結果、「学生生活における積極性の退却」は「将来の見通し」、「自己受容」、「日々の抑揚」の3因子から、と「学業からの退却」は「将来の見通し」、「自己受容」、「現在の充実感」の3因子から、「授業からの退却」は「現在の充実感」のみの影響を受けていることがわかった。仮説Ⅰは支持された。

「自己受容」因子 時間的展望体験尺度は、白井(1994)や杉山・神田(1996)による先行研究とは異なり、過去・現在・未来で因子が分岐しなかった。「自己受容」は本研究において新しく抽出された因子である。項目内容から、過去・現在・未来、全ての時制において、自身を肯定し、受容できているかどうかを測定した尺度であると解釈した。時間的展望における時制の扱いについては、さまざまな検討が重ねられてきた。都筑(1982, 2007)は、時間的展望はゆるやかな構造をなしていること、自我同一性の発達に伴い、過去・現在・未来を統合的に捉えるようになることを指摘している。また、都筑(2011)では、現代社会において希望に満ちた時間的展望をもつことの難しさが挙げられた。今だけを生きる「その日暮らし的」な人々がいる一方、今を未来の手段として「犠牲的」に過ごす人々もあり、時間的展望をもちきれない点で共通していることを指摘した。これらのことから、測定する時期や年齢によっては、厳密に時制が区分されない、あるいは、時代背景の違いから、現代の大学生では時間的展望の捉え方が変容してきた可能性が考えられる。

各因子に時間的展望が与える影響 アパシー傾向について、「学生生活」「学業」「授業」と3つの領域、それぞれで影響を受ける時間的展望の下位尺度が異なることが新たに発見された。「学生生活」や「学業」においては共通して、将来についての見通しが退却に負の影響を与えるが、「授業」はどちらからも影響を受けていなかった。

「学生生活」と「学業」では共に「自己受容」からマイナスの影響を受けていたが、一

方で「学業」はプラスの影響を受けている点が興味深い。つまり、「学生生活」は、自己受容がある場合に退却を抑制するが、「学業」は、自己受容がある場合に退却に繋がる。

「学業」と「授業」では、現在の充実感から共に負の影響を受けていた。「学生生活」では、今回選択されたモデルで唯一「日々の抑揚」から負の影響を受けていた。

杉山・神田(1996)では、現在尺度である「現在の充実感」と未来尺度である「目標指向性」および「希望」からアパシー傾向への影響が確認された。本研究においても、アパシー傾向の下位尺度によって違いはあるものの、同様の結果が得られた。加えて、過去に関する時間的展望の下位尺度である「自己受容」からも影響を受ける可能性が示唆された。

アパシー傾向測定尺度について

アパシー傾向測定尺度の因子分析では、先行研究と同様、3因子が抽出された。先行研究と概ね一致する構造が見られた。しかしながら、鉄島(1993)において、項目10は「授業からの退却」、項目14, 15は「学業からの退却」に含まれる項目であったが、本研究では異なった。項目内容を見てみると、項目10「授業の履修を真剣に考えなかったために、後になってから困ることが多い」、項目14「授業は積極的に参加するというよりも、いつもただ座っているだけと言う感じだ」、項目15「勉強に関する本を読んでもすぐに飽きてしまう」など、学生生活の積極性に関わる項目であると考えられ、「学生生活における積極性の退却」因子の項目として解釈するに至った。

鉄島(1993)がアパシー傾向測定尺度を開発した当時の大学生と、大学全入時代とも言われる現代の大学生とでは、社会・環境の変化に伴い、「大学」の捉え方、延いては「大学生活」自体が変化してきていると言える。また、本研究で対象となった参加者は、教育学部の学生であり、教師を目指して進学してきた者が過半数を占める。必修科目を含めて、授業の出席状況によっては教育実習への参加あるいは教員免許の可否に強く影響している。項目分析において削除された数項目(例えば、「大学内にいても、つい授業に出るのが面倒くさくなって欠席してしまうことがある」「特別な理由がないのに重要な試験を受けずにいる」など)は一般的な大学生と比しても、低得点となり易かったことが想像される。本研究で、特有の因子構造を示した一因であると考えられる。

時間的展望 時間的展望体験尺度の因子分析では、白井(1994)による先行研究と同様、4因子構造を抽出した。しかしながら、先行研究のように、過去・現在・未来は明確に分岐されなかった。仮説Ⅱは支持された。先に述べた様に、検討を重ねていく必要があると考えられる。

今後の課題 「自己受容」が「学生生活」には負の影響を及ぼし、「学業」に対しては正の影響を及ぼしている可能性は、本研究において新しく得られた知見である。今後も、時間的展望の時代的な変化を明らかにすること、また、大学生や大学の有り方の変化にも着目し、アパシー傾向に影響を与える要因に関する研究を重ねていく必要がある。

「将来の見通し」を含めて、未来の時間的展望がアパシー傾向を抑制する可能性が示唆

された。これは先行研究と同様の結果である。例えば、大学入学時からキャリア教育を行い、大学での過ごし方や卒業後の進路についての見通しをもてるようにするなど、サポートを行い、大学生の不登校や中退といった問題の一因となり得るアパシー傾向を緩和していくため、今後更なる実証的な研究も行われることが期待される。

引用文献

- 荒井佐和子・石田 弓・大塚泰正・岡本祐子・兒玉憲一 (2011). 不登校大学生に対する大学教員の視点と支援 広島大学心理学研究, **11**, 339-347.
- 狩野武道・津川律子 (2011). 大学生における無気力の分類とその特徴—スチューデント・アパシーと抑うつ—の視点から— 教育心理学研究, **59**, 168-178.
- 笠原 嘉 (1984). アパシー・シンドローム 岩波書店.
- 笠原 嘉 (1988). 退却神経症 講談社.
- 内閣府 (2015). 「子ども・青年白書第3章生育環境第1節教育」
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27honpen/pdf/b1_03_01_01.pdf (2015年6月9日).
- 下山晴彦 (1996). スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, **44**, 350-363.
- 吉村麻奈美 (2003). 青年期の心理的問題. 下山晴彦(編) よくわかる臨床心理学 ミネルヴァ書房 pp.106-107.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **65**, 54-60.
- 杉山 成・神田信彦 (1996). 青年期における一般的統制感と時間的展望—アパシー傾向との関連性— 教育心理学研究, **44**, 418-424.
- 鉄島清毅 (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, **41**, 200-208.
- 都筑 学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 73-86.
- 都筑 学 (2007). 青年の時間的展望 南 徹弘(編) 発達心理学 朝倉書店 pp.202-215.
- 都筑 学 (2011). 時間的展望の発達 日本発達心理学会(編) 時間と人間 新曜社 pp.293-305.
- 吉田統子 (1996). 大学生のアパシー傾向測定尺度 APS の作成 日本教育心理学会総会第38回発表論文集, 544.